パスカルの≪アポロジー≫のプラン復元に関して（一）

竹下春日

I　Lafuma への批判

Lafuma がパスカルの≪パンセ≫の≪第一写本≫（B. N. f. fr., ms. 9203）を検討して，これがパスカルの死後における草稿状態を反映したものであることを発見し，かつこの結果にもとずいて該写本の目次（27 個のタイトルよりなる）[1] にしたがいつつ，彼が未分類の諸断章（以下 Non classé と仮称）を，パスカル自身によるとおもわれる[2]既分類の断章群（以下 Classé と仮称）中に配分したことは，すでに周知の事実にぞくする[3]。そうして≪アポロジー≫の復元（実際可能な範囲における）[4]にかんするかぎり，Lafuma の分類が現存における合理的なものの一つであることは，これを認めてよい。しかしわれわれ自身の立場から観るとき，なお批判すべき重要点が存することも，これを否定し難い。われわれは Lafuma を批判しつつ，さらに進んで断章群を分類すべき量的規準を提示することを試みたい。

（1）常識的に見て，われわれは強い関心の対象となる事柄にかんする断章群と，より低い関心の対象となる事項にかんする断章群とを区分することができる。そうしてパスカルの場合，写本目次の 1°～11° が後者に，12°～27° が前者に相当すると言いうる。なぜなら 1°～11° は，パスカルがその≪アポロジー≫中に想定した登場人物[5] が信仰以前の状態から魂の安定を求めて諸哲学諸宗教を遍歴する過程を扱ったものであり，この人物が漸く聖書との出会いを通じてキリスト教こそ己れの求める真実の宗教たることを自覚するに到る経過と論証とを展開する場面こそ，12°～27° であるからである。われわれは，12°～27° を重要断章群と呼び 1°～11° を非重要断章群と称したい[6]。

（2）次にわれわれは，タイトルおよび小見出し[7] がなぜ附与せられている断章が存するのか，その理由を推定してみたい。このことと関連して，タイト

ル・小見出しのない断章も数多く存するという事実も，われわれは顧慮しなければならない。パスカルの場合を想像すると，Classé（既分類断章群）にかんするかぎり，総数371に及ぶ断章を27個の≪章≫ chapitres（既出の1°～27°）に分類する必要があったのである。パスカルは1°～27°を順次に執筆したのではなく，内容を異にする諸断章を併行的に執筆したのであり，その結果同一の大型紙にかかる断章もしくは断章群が相接して書き残されることになったのである[8]。したがってパスカルは，分類のため或る時期に諸断章を再読する必要があったのである。したがってパスカル自身が再読を想像した場合，直ちに一定の分類項目に編入しうる自信のあるものと，そうでないものとがあったはずである。前者は彼自身の印象に深いものないし強い関心の対象となったものであり，後者は然らざるものであったと，われわれは推定することができる。そうであったとすれば，前者にはタイトル・小見出しを附与する必要はなくかくする必要があったのは後者のみと言いうる。そうしてタイトル・小見出しのある断章が非重要群中に多く，これを欠くものが重要断章群中に少いであろうことは，想像に難くない。これを換言すれば，非重要群中のタイトル・小見出しのある断章群が非重要断章群全体の中で占める割合（パーセンテージ）は重要群中のタイトル・小見出しのある諸断章が重要断章群全体のうちで占める割合より大であるということである。すなわち，タイトル・小見出しのある諸断章の総数をB，これをふくむ非重要断章の総計をA；重要断章群全体の数をA′，これに含まれるタイトル・小見出し附きの断章群をB′とすれば，$B/A>B'/A'$である。そうして表Ⅰは，これを証している（$B/A=51\sim52\,\%>B'/A'=30\,\%$）。

以上，（1），（2）を総合して，われわれはClasséの重要断章群と非重要断章群との関係は，$B/A>B'/A'$であると規定することができる。両断章群の関係がかように単純な数関係をもつのは，両関係の間にパスカル自身の心理作用（むしろ人間心理に広く見られる）――先述したタイトル・小見出しの附与・非附与にかんする心理のはたらき――が介在し，この心的作用が両断章群の数的関係を結果したのである。それゆえわれわれは，この数的関係（結果）から出発して，かかる心理的働き（原因）を媒介し，各断章群の基本的性格（原因の原因）を推測しうるのである。言い換えれば，$B/A>B'/A'$の関係にある二つの断章群（内容的に連関のある）は非重要-重要ないし補足的-中心的関係にあることが，以上より知られるのである。

われわれは次にClasséの総数（上述の$A+A'$）をPとし，これに含まれるタイトル・小見出し附きの断章の総数（$B+B'$）をQとすれば，PにおいてQの

占める割合（パーセンテージ）は Q/P として示される。そうして Non classé における Classé の P, Q, Q/P に相当するものを，それぞれ R, S, S/R とすれば表Ⅱのごとくになる。すなわち Q/P=38～39 %>S/R=21～23 %である。かくしてわれわれは次のごとき重要なる結論に到達するのである——Non classé は重要（中心的）断章群であり，Classé は非重要（補足的）断章群である。

さて既に述べたごとく，Lafuma は Non classé の諸断章およびその他を[9]，Classé の 1°～11°，12°～27° の二つの部分に配分したのであるが，これは Non classé を中心とすべきであるとするわれわれ自身の立場らすかれば，Non classé の分類項目と Classé のそれ（titres）とを同一視し，Non classé の分類項目中に Classé の断章全体を配分したことに相当する。こうした場合も理論上可能であるが，Lafuma による Classé と Non classé の総合の結果はどうであるかと言えば，表Ⅲのごとくである（表Ⅰにおける A, B, A′, B′ に相当するものを，それぞれ X, Y, X′, Y′ とする）。これによれば，Y/X>Y′/X′ であることは合理的であるが，その差がわずか 2～5 %にすぎないことは，不合理であると言わねばならないのである（この理由についてはⅡ参照）。

Ⅱ　断章配分の量的規準について

われわれは Lafuma による配分の数量が不合理であることを述べたが，しからば Non classé そのものの合理的な配分はどのようなものであろうか。表Ⅰの A, B, A′, B′ に相当するものをそれぞれ (A), (B), (A′), (B′) とすれば，それは言うまでもなく (B)/(A)>(B′)/(A′) であるように配分することであるが，パスカルにあっては (B)/(A) と (B′)/(A′) との差はほぼ一定でなければならない。なぜなら表Ⅰ，Ⅱにより B/A−B′/A′=51～52 %−30 %=21～22 %，Q/P−S/R=38～39 %−21～23 %=15～18 %で[10]，このパーセンテージの近似（3～7 %差）は断章の総数がそれぞれ 371 (P)，333 (R) というふうに 300 を超える多量の数字であることから言って偶然ではありえないからである。これは基本的には，タイトル・小見出しの附与・非附与にかんするパスカルの判定に定常性があったこと，言いかえれば直観的判定が一定のペースをもって——意識的ないし無意識的なる判定回数が 300 回を超えるにかかわらず——行われたことを意味するものにほかならない。したがってわれわれは (B)/(A)−(B′)/(A′)=15～22 % と考えるべきである。

さてパスカルのプラン復元の問題に立ち帰るとき，その可能性は形式的には

多数ありうるが，このうちのどれであるかは，その質——断章の内容——の上から決定するよりほかはない。かように≪アポロジー≫復元の問題はその前途きわめて多難なるものがあるが，問題解決のためには Non classé が Classé に比して重要群であること，また断章の配分は 15～22 %差をもつべきこと，これらのことをわれわれは忘れてはならないのである。これらは少くとも，次の二つの意義を有している。≪アポロジー≫を構成すべき全断章を既述のごとく二つの部分（重要・非重要の）に分けた場合，断章の配分が 15～22 %差をもつべきであるということは，従来パスカルのプランとして提示された諸家の試案を検討すべき試金石として役立つ。また，Non classé が重要断章群であり，これに対して Classé が非重要断章群であるということは，パスカルが Classé をポール・ロワイヤルにおいて発表した以後[11]，≪アポロジー≫のプランの作製を断念したのではないかという論理上ありうべき可能性を排除するばかりでなく，パスカルは準備態勢を一歩押し進めたこと，すなわちポール・ロワイヤルに於ける講話[12]当時の≪アポロジー≫のための諸断章は文字通り下準備にすぎないものであり，Non classé こそは本格的執筆へ一段と近づいた下書であることを示している[13]，と言えよう。まことに≪アポロジー≫復元の問題の解決への道は遠い，しかしながら能うるかぎり努力することは，われわれの学問的義務でなくてはなるまい。（完）

表 I

1° ｜ 11°	総　　計	A	138
	タイトル・小見出しつきのもの	B	70～72
		B/A	51～52%
12° ｜ 27°	総　　計	A′	233
	タイトル・小見出しつきのもの	B′	70～71
		B′/A′	30 %

表 II

Classé	P	371
	Q	140～143
	Q/P	38～39%

表 II

Non classé	R	333
	S	69～76
	S/R	21～23%

表 III

1° | 11°	X	295
	Y	95～97
	Y/X	32～33%
12° | 27°	X′	409
	Y′	114～122
	Y′/X′	28～30%

（注）

（1） 27 個のタイトルとは次のものである——1° Ordre ; 2° Vanité ; 3° Misère ; 4° Ennui ; 5° Raisons des effets ; 6° Grandeur ; 7° Philosophes ; 10° Le Souvrain Bien ; 11° A. P. R. ; 12° Commencement ; 13° Soumission et usage de la raison; 14° Excellence ; 15° Transition, 15° bis La nature est corrompue ; 16° Fausseté des autres religions ; 17° Religion aimable ; 18° Fondement ; 19° Loi figurative; 20° Rabbinage ; 21° Perpétuité ; 22° Preuves de Moïse ; 23° Preuves de J.-C.; 24° Prophéties. 25° Figures ; 26° Morale chrétienne ; 27° Conclusion (L. Lafuma, Histoire des Pensées de Pascal, Paris, 1954, p. 30-31. に拠る).

（2） Voir ibid., p. 85 et 105 ; Blaise Pascal, l'homme et l'oeuvre (Cahiers de Royaumont, Philosophie N°I), Paris, 1956, p. 95 ; Ecrits sur Pascal, Editions du Luxembourg, Paris, 1659 p. 200-201.

（3） Blaise Pascal, Pensées sur la religion et sur quelques autres sujets, avant-propos et notes de L. Lafuma, Edition intégrale, Troisième édition, Delmas, 1960. この書の初版（二冊本）は 1949 年に刊行された。

（4） ≪アポロジー≫復元の可否については，パスカルが未分類断章中の最後のものを書き了えた時期以後のプランは，これを知りえない。したがって復元は不可能である。また，パスカルが健康に恵まれたと仮定した場合のプランもまた論外である。われわれの意図するところは，残された諸断章を手掛りとして，パスカルのプラン（該

断章群が執筆された当時の）を可能なかぎり追究せんとするところにあるのである。

（5）　この登場人物は,≪パンセ≫のポール・ロワイヤル版（1670年）の序文（Etienne Périer による）中と，Filleau de la Chaise, Discours sur les Pensées de M. Pascal (1667) とによって知られている——Voir Blaise Pascal, Pensées sur la religion et quelques autres sujets, Introduction de L. Lafuma, Editions du Luxembourg, Paris, 1951, t. III Documents, p. 134 (Etienne) et 93 (Filleau).

（6）　この 1°～11°, 12～27° の番号は注（1）のそれである。ただしこの番号は Lafuma が便宜上附したものである。

（7）　この論文中の「タイトル」とは Lafuma のいわゆる<titres>——1°～27° の番号が附されたもの——を指し,「小見出し」とは「タイトル」以外のものを指している。

（8）　注（5）の引用書 (Editions du Luxembourg), t. I Textes, p. 14 に拠る。

（9）　Lafuma は≪アポロジー≫を構成するものとして，Non classé 以外に『草稿原本』,『ポール・ロワイヤル版』,『ペリエ写本』,『ゲリエ写本』,『ヴァラン稿本』中より諸断章を採用補足している（注（3）の引用書参照)。われわれも Lafuma に従っている。

(10)　この数式中の B/A=51～52%, Q/P=38～39%, S/R=21=23% は，それぞれタイトル・小見出しつきのものと断定しえないが，この可能性をもつ諸断章をも含めた数字に基づいている。かような断章は Bに2個，B′ に1個，Qに3個，Sに7個存する（表I，II 中のB, B′; Q, S における～の左右の数字の差がこれである)。

(11)　われわれのいわゆる Classé——Lafuma のいわゆる<les papiers classés>——が，パスカルのポール・ロワイヤルにおける講話のための草稿綴（liasses）であろうということは，Mesnard と Lafuma の両者において一致している——Voir J. Mesnard, Pascal, l'homme et l'oeuvre, Paris, 1956, p. 137-138 ; L. Lafuma, Controverses pascaliennes, Paris, 1952, p. 43.

(12)　いわゆるパスカルの『ポール・ロワイヤルにおける講話』la conférence à Port-Royal は，次の諸事実によって，実際に行われたものとされている——（1）ポール・ロワイヤル版の序文中に述べられていること，（2）Filleau の Discours sur les Pensées de M. Pascal の中に出てくること（以上注（5）参照)，（3)≪パンセ≫のうちに A. P. R. なるタイトル・小見出しをもった断章（La. 309—Br. 430 ; La. 237—Br. 416）があり（注（1）参照)，これらが A Port-Royal と解釈されること．この講話の行われた時期については，Mesnard は 1658 年5月頃とし[1]，Lafuma は 1658 年10 月-11 月としている[2]。前述の断章中に≪A. P. R. Pour demain.≫とあることから，普通少くとも二日に渉って行われたものと推定されており，Filleau によれば，講話は≪少くとも二時間≫続いたとされている[3]。しかしこの講話の史実性

は，Cognet 師によって疑問視されている。同師によれば，当時のポール・ロワイヤルの多量の書信を検査したにもかかわらず，この講話を暗示するものは何処にも見出されなかったという[4]。しかし，われわれは一応通説に従っておく。

1) Mesnard, op. cit., p. 129.

2) Lafuma, Controverses pascaliennes, p. 44.

3) Ecrits sur Pascal, Paris, 1959, p. 115, p.-s.

4) Blaise Pascal, l'homme et l'oeuvre (Cahiers de Royaumont), p. 100.

(13) パスカルのプランが Non classé のみで実現されるはずであったか，Classé の諸断章をふくむはずであったかは，さらに検討すべき重要問題である。いづれにせよプランを完全に実現すべき全断章がパスカルの生存中に書かれなかったことは，事実とおもわれる。したがって断章をすべて完全に書き上げたであろう場合（その数量がきわめて莫大になった場合）の重要断章群と非重要断章群との前述のごとき配分差は15～22 %ではありえないとする反論が成り立つとしても，われわれは次のように答えたい。この場合を想定して論ずることは，本論文の主旨に矛盾すると。なぜならわれわれは，パスカルが Non classé 中の最後のものを書き上げた当時のプランだけを対象としているからである（注（4）参照）。

<補注>——パスカルが彼の諸断章にタイトル・小見出しを附与した理由について，なお若干のことを附記しておきたい。（1） それは本文中に述べたごとく，再読分類の際或る断章をどの分類項目中に配慮すべきか直ちに判定しうるように，かく附与したのである。つまり，断章を書いた時は配慮すべき分類項目が脳裏にあるが，分類の時までこれを記憶しておくことにパスカルは自信がなかったであろうと推測されるのである。なぜならパスカルの記憶能力（常人以上であったにもかかわらず）は，断章群執筆の当時は，病気のために十分ではなかったからである。パスカルの甥 Etienne Périer はポール・ロワイヤル版序文中で，次のように叙している——≪だが，なにか新しい思想や見方や観念あるいはなにか絶妙な言い廻しや表現にいたるまで，いつか自分の企てに役立ちそうなものが心に浮んだ場合にも，当時氏は健康だったときと違ってこれに意を注いだり，自分の心中や脳裏にこれらを銘記したりできるような有様ではなかったので，忘れないために (pour ne le pas oublier) それらの或るものはこれを書きとめた方が好いとおもったのである。≫ (Pascal, OEuvres complètes, Présentation et notes de L. Lafuma, Editions du Seuil, Paris, 1963, p. 497.)（2）次に Lafuma によれば，パスカルが≪アポロジー≫のための断章を書き始めたのは 1657 年6月からであり，その分類をはじめたのは 1658 年代のことである。(Lafuma, Controverses pascaliennes, p. 33 et 46.) これによってわれわれは，パスカルの断章執筆とその分類とは同時に行われたのではなく，少くとも約6カ月の期間が介在したことを知るのであり，したがってまた分類を円滑ならしめるために断章

の或るものにはタイトル・小見出しが必要であったろうことをも知るのである。(3) だがさらにパスカルのタイトル・小見出し附与は，普通われわれが著作や論文を書く場合に見出しを附けるのとまったく同じ理由によったのではあるまいか，という極めて常識的な疑問を，われわれは無視できないであろう。しかしこの疑問は，パスカル自身が残した断章の分類綴（liasses）の実際を観察するとき，容易に解消しうるものである。一例を挙げると，≪Ordre≫なるタイトルを持ったリヤスには総計 12 個の断章が含まれており，このうちじつに 5 個の断章に同一のタイトル（≪Ordre≫）が附与されているのである。同一の事項にかんする論述全体を通じて，かように何度も同じタイトルを反復することは，煩雑でもあり不体裁でもある。しかもこのタイトルをもった一断章（La. 31—Br. 602）のごときは，わずか一行にすぎないのである。これは，直接読者の眼を予想する普通の論文や著作における叙述と異ることを，示すものと言わなければならない（人はこの際パスカルの≪真空論≫における彼の整然たるタイトル・小見出し附与を想起すべきである）。つまり，リヤスを構成する諸断章は多かれ少なかれメモの性格を帯びた下書であることを物語っているのである。かくてパスカルがタイトル・小見出しを附与した理由について，われわれは本文中に述べられたものを含めて四つの事実からこれを確定しうるのである。

さてタイトル・小見出し附与の性格が叙上のごときものであったとしても，なお次のごとき疑問がありうるであろう。すなわちこれらが附与されたのは，一般に諸断章の内容が重要であったからこそ，忘却を防ぐために，かくは附与されたのではあるまいかという疑問である。だがもしこの推定が正しいとすれば，タイトル・小見出しの附いたものが重要断章群において占める割合（パーセンテージ）は，これらが非重要断章群中で占める割合よりも大きいはずである。しかし，事実は本文におけるように両者のパーセンテージの関係は逆である。したがって，われわれの主張は正しいものと見做されなければならない。

——タイトル・小見出しつきの断章であるか否かは，≪パンセ≫の次の諸版を参照比較してこれを決定した——Ed. Lafuma（注 3，8 および補注に記載のもの）；

Ed. Tourneur-Cluny (Paris, 1938); Ed. Brunschvicg (Pensées et opuscules, Paris, 1953); Ed. Tourneur-Anzieu (Paris, 1960).（注了）